

# 汲古一紙

## 『隠元・木庵・即非の書』(二)

中村素堂

### 二 黄檗の書僧

わたくしどもは、この師弟、只弟の三禅師がみな法書をもよくせられ、江戸中期以後の日本書道史に、唐様流行の機縁を作られたことに特に注目するのであるが、三師みな明代の人であるからついでに明代の書壇を一応展望してみると、趙子昂は大分前期であるが、その存在は大きく影響していたし、祝枝山・董其昌・文徵明それに王履吉・倪元璐・張瑞図や楊州八怪などと称せられて、日本人にも親しい名の大家がたくさんおり、すでに唐様と呼ばれて日本の儒者詩人・仏門の人々に珍賞されてもいた。ことに五山文学と謳われたある時期の臨済系師家たちによる中国詩・書への敬慕は大変なもので、明風の流行は次第に人気をたかめてきて、徳川時代の儒教尊重と抹茶系茶道の隆盛とは、これまた書といえは唐様でなくてはならないほどの観をなしていた。

また抹茶系茶道の方でも宋・元・明の禅家の書蹟を「墨蹟」と呼んで歌切とともに茶室の床には欠かせない宝什として、金銀をおしまない蒐集をしていた。いま日本に現存する中国禅僧の墨蹟はほとんどその本国でさえ見ることのできない貴重品だといわれている。そしてこれは鎌倉末から室町期の日本禅宗にも大きく影響したらしいけれど、その手法をそのまま習得した。すなわちお習字型のものとはほとんどなく、ただその気迫、風韻などにヒントを得ていたようである。禅林風とはいっても何々流というようなものにはならなかった。これは日中ともに個性の表現が強烈で、技法を二義的に見ていたようだからであろう。

これが型のやかましい茶道に無上の観賞物として珍重されるといふのもちよつと不思議な感もするのである。

ところがこの黄檗の師家の書は、歴然たる明代の書風であり個性

は三者三様でありながら、どことなく共通したものがあって、これ以前の禅林墨蹟よりはいく分か儒家者流、書家者流のものに近似した点が見られるのである。そしてこの一宗の歴代はみな破綻のない温雅な書をかき、「黄檗の書僧」とまでいわれて技法的にも前者よりは儒家者風の要素を多く持っている。

このようにいうと、黄檗と臨済とは何か別の宗門のように思われるが、本来は全く臨済の中の一派ほどのもので、万福寺歴代の位牌を拝してもことごとく法名に冠して「臨済正宗」の四字が記されているのでも判る。黄檗宗という宗字も、実は明治の初めに政府との話し合いがあつて決めたもので、もとは臨済禅中の一派といつたものであつたということである。

二松学舎大学がまだ専門学校の時分の教頭で、山岡鉄舟門下の人であつた佐倉達山先生はむかし、中国で教官をしていた時、あちらの黄檗山を訪ねられたが、修禅の方法に多少の風格はあつても、あれは立派に臨済禅であるともいつておられた。

中国では宋・元、日本では鎌倉・南北朝という時代からの渡来で、室町時代の茶道成立に資助したものが大きかつたこともあるのか、臨済門の書は寺よりも抹茶家を通じて知られ尊重されているの観がある。それに比べると黄檗の方は江戸中期にかかるころの渡米で、明清となつて中国仏教も少しく気風が移つたのか、抹茶系とは全く結びつかず団茶という中国禅刹本来の煎茶の作法がこの宗門にとつて強調され、また普茶料理といわれる精進料理などがここから普及して、庶民の日常生活に大きく広く影響してゆき文人的遊びといえるような煎茶式が漢学趣味と結んで次第に別な流行となると、黄檗僧の墨蹟はこれらの場に不可欠のようにならされて、侘びた儒家・好事的士人の文房清玩とマッチして詩興を助ける書のようになつた。(つづく)

（『大法輪』昭和四十七年七月）

『筆間雜記』中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。